

日本中東学会ニューズレター
JAMES
NEWSLETTER
No. 104
7/6 2005

目 次

新会長からのメッセージ：21年目の日本中東学会.....	1
日本中東学会第22回年次大会のお知らせ.....	4
アジア中東学会連合（AFMA）第6回東京大会のお知らせ.....	5
第2回中東学会世界大会（アンマン）パネル募集のお知らせ.....	9
理事会・総会報告.....	10
第21回年次大会報告.....	16
日本中東学会年報（AJAMES）編集委員会報告.....	30
第19回国際宗教学宗教史会議世界大会参加報告.....	34
寄贈図書.....	35
2006年度会費納入のお願い.....	36
事務局より.....	36

新会長からのメッセージ：21年目の日本中東学会

第11期会長 三浦 徹
（お茶の水女子大学文教育学部）

< 20年のあゆみ >

1985年4月に発足した日本中東学会は、今年成人式を迎えた。20年の間に、会員数は2倍（322名から672名へ）、財政規模は2.7倍となり、さらに近年は、科学研究費補助金（定期刊行物、公開講演会、中東研究文献データベース）や国際

交流基金（国際会議派遣・招聘）の助成をえて、多面的な活動を行っている。年次大会の発表者も年々増加し、設立当初は2部会約10本の研究発表であったが、近年は5から6の部会に分かれ、計40本以上の研究発表が行われ、大会参加者も昨年の明治大学大会では300名を越えた。AJAMESの寄稿数についても、創刊号の15本から33本（2004年）と倍増し、2003年度からの年2回刊行と外国語論文比率の上昇（約60%）により、国際学術雑誌の名実をともに実現しつつある。とはいえ、20年の道のりは平坦なものではなく、1995年には繰越金がわずか20万円でAJAMESの印刷費用も払えないという財政危機に陥ったが、その後、理事・事務局の努力で健全な財政状態に回復している。

学会の現況はどうだろうか？年齢構成では、30歳台30%、40歳台23%、50歳台18%、60歳台12%と、世代の偏りがなく、高齢化する日本社会とは逆に若い世代の会員が増え「未広がり」になっている。ジェンダーバランスでは、全会員のうち、女性会員は28%であるが、こと30歳台では47%とほぼ均衡している。専門分野や研究地域については、ディシプリンでは歴史学（35%）、地域ではアラブ世界（26%）、国ではエジプト（20%）が首位を占める。過去の正確なデータがないため比較が難しいが、この10年間に大きな変化はなく、全体としてはむしろデコボコがそのまま再生産されている感がある。職業については、大学勤務者が半数を占め、国際機関やジャーナリズムや企業などの従事者はごく少数で、この点では「社会に開かれた学会」という目標はなお途上にある。（以上のデータについては、学会ホームページに掲載した「日本中東学会20年のあゆみ」を参照）

成人を迎え「にほんちゅうとうがっかい」とはなにかをあらためて考えた。まず、学会とは、「任意の個人」による自発的組織であり、けっしてヒエラルヒー組織ではない。個々人の会費が基盤であり、大学教授も学生も社会人もみな一会員として対等な関係にあり、誰もが年次大会やAJAMESで研究などを発表する機会をもっている。第二に、日本中東学会は、設立当初から、狭義の日本のアカデミズムのなかの組織ではなく、外交官、ジャーナリスト、教員などひろく社会に開かれた学会、また国際的にも開かれた学会をめざしてきた。このような理念は、今日の状況ではどのような意味をもっているのだろうか。

< 中東研究の現在 >

近年の大学改革によって、中東研究の環境も変化している。戦後の日本の中東研究は、中東やイスラームに関する独立の地域研究機関をもたずにきた。日本中東学会としては、中東に特化した国立の研究機関の設立を広くうたえてきたが、いまだ実現をしていない。その反面、機関やディシプリンを越えた学際的な連携研究を1960年代後半から開始し、「イスラームの都市性」（1988-91）、「イスラーム地域研究」（1997-2002）は世界的にも知られるところとなった。その利点は、

個人単位でテーマに応じて研究プロジェクトに参加することができることで、中東研究の「出入り自由な」雰囲気は、他分野の学会が瞠目するところであった。中東関係のセンターや学科をもつ米国の大学が、かえって機関をベースとした研究活動に収まっていることと大きな相違点であった。

しかし、21世紀COE（2002年開始）や国立大学法人化（2004年）以降、研究も教育も大学・機関を単位として、相互に競い合って成果を求められるようになった。その是非はさておき、こと中東研究についてはこの変化は大きな影をおとしている。すなわち、日本の中東研究者の多くは、独立の研究単位をもたないため、既成のディシプリン・分野にばらばらに帰属しており、その所属機関の枠内で活動せざるをえなくなっている。しかも、進行中の21世紀研究COEには、中東研究自体を主題とするものはないため、COE以後近々に独立の研究・教育機関が設立される見通しもない。

第二に、9/11事件以降の中東への日本社会の関心の変化である。一方で、中東・イスラームに関する研究、情報収集、理解の必要が叫ばれ、関連の出版物や報道も数倍に増加している。他方、首都圏の高校教員による高校生のアンケート調査（2003年）では、イスラーム世界は「教条的・不寛容」「奇妙な習慣をもち」「攻撃的」「不可解」というステロタイプ化したイメージが強くできあがっていることが報告されている。米国でも韓国でも同様の状況があり、中東研究・中東理解のための特別予算が設けられている。マスコミや一般の無理解を嘆くだけでは、むしろ学会との理解の溝は広がるだけであろう。日本中東学会では、すでに公開講演会などで高校をはじめ、学校教育の現場にたつ教員の方との連携を始めている。さらに一歩進んで、学会として中高の教員の方々と連携し、教材や教育法の開発や研究にとりくんでいくことを提案したい。それは、私たちの中東研究になにが欠けていたのかを知る機会となるはずである。

以上に述べたことには、学会としてできる範囲をこえた問題も含まれている。しかし、日本の中東研究や学会をとりまく環境をみるならば、学会の役割とは、国内外への、機関をこえた、研究・教育の情報ネットワークづくり、であろう。それは、日本中東学会が設立当初から掲げてきた「オープンな学会活動」という目標を、さらに深化・浸透させることである。そのなかで、IT技術の果たす役割は大きい。日本中東学会では、すでに会員メーリングリストによる研究会などのEメールニュースを配信している。2001年に200余名でスタートしたリストは今年477名の登録者に倍増し、ニュースの投稿も増えている。学会のホームページで公開・更新されている「中東研究文献データベース」は、簡便な検索の道具として好評である。AJAMESは今夏から、国立情報学研究所（NII）電子図書館にオンライン・ジャーナルとして掲載される。AJAMESに掲載された論文などは即座に世界に流通し、そこでは、国内・国外という境はなくなるだろう。

中東が私たちを惹きつけてやまない理由のひとつは、人々の豊かな表情にある。中東学会世界大会や AFMA 大会に参加するにつけ、中東研究のグローバル化とともに、研究者の豊かな個性を痛感する。その意味でも、日本中東学会がもってきた、世代や研究分野をこえた個々人との交流関係も大事にしたい。私自身、学会の多数を占める若い会員の顔と名前が一致しなくなってきた。会長の役割のひとつは看板となることであろう。わずか2年の間であるが、学会活動への意見や疑問など、気軽に声をかけていただきたい。

日本中東学会第22回年次大会のお知らせ

2006年度の日本中東学会第22回年次大会は、5月13日(土)と14日(日)の2日間にわたり、東京外国語大学を会場にして開催されます。実行委員会は同校のアジア・アフリカ言語文化研究所のスタッフを中心に、外国語学部スタッフおよび中東学会・国際交流委員などから構成されます。今回は、通例の研究発表とともに、第6回 AFMA 大会も並行して開催されます。後者に関しては、国際交流委員会を中心にプログラム構成などが行われます。

中東学会も発足して20年以上を過ぎ、会員数も発足時の倍以上、700人近くの規模に成長しました。大変喜ばしいことですが、会員数の増加に伴い、年次大会での研究発表のあり方などに関して、発足時には考えられなかったさまざまな課題が生じてきております。しかし、第22回大会はこれまでの方針を可能な限り踏襲して、会員の方々に先端的な研究発表をする機会を提供して行こうと思っております。

なお、大会準備をスムーズに行うために参加費・懇親会費の前納制、幼いお子さんをお持ちの会員の方への便宜のために「託児所」の設置なども検討しております。これらは今後より具体的に話を詰め、改めてご連絡・ご相談いたしたいと思っております。

また、通例の研究発表のみならず、英語等による AFMA での発表にも、多くの会員の方々が積極的にご参加くださいますようお願い申し上げます。

(第22回年次大会実行委員長 大塚 和夫)

開催日時： 2006年5月13日(土)～14日(日)

開催場所： 東京外国語大学(東京都府中市)

実行委員会

委員長： 大塚和夫(東京外国語大学 AA 研)

事務局長： 近藤信彰（東京外国語大学 AA 研）

委員： 新井和広（東京外国語大学 AA 研）、黒木英充（東京外国語大学 AA 研）、堀井聡江（東京外国語大学 AA 研）、林佳世子（東京外国語大学）、八木久美子（東京外国語大学）、山下王世（東京外国語大学）、赤堀雅幸（上智大学）、臼杵陽（国立民族学博物館）、栗田禎子（千葉大学）、酒井啓子（日本貿易振興機構アジア経済研究所）、三浦徹（お茶の水女子大学）、飯塚正人（東京外国語大学 AA 研）

【連絡先】 日本中東学会第 22 回年次大会実行委員会事務局
〒183-8534 東京都府中市朝日町 3-11-1
東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所
近藤信彰研究室気付 FAX 042-330-5543 E-mail: jameet@aa.tufs.ac.jp

アジア中東学会連合（AFMA）第 6 回東京大会のお知らせ

日本中東学会、韓国中東学会、中国中東学会、モンゴル中東学会で形成されるアジア中東学会連合（AFMA）の 2 年に一度の大会が、来年 5 月、日本中東学会年次大会と同時に東京外国語大学で開催されます。日本中東学会を始めとして、会員の積極的な参加を呼びかけます。

なお日本中東学会は 2005 年から AFMA 会長・事務局を担当していますが、日本中東学会会長が交替したことを踏まえ、三浦会長が AFMA 会長に就任いたしました。

AFMA 第 6 回東京大会開催要項（2006 年 5 月 13-14 日）

テーマ “Middle East Perspectives from East Asia: Diversifying the Middle East and Islamic Studies”

場所：東京外国語大学（東京都府中市）

暫定的大会プログラム

第 1 日目（2006 年 5 月 13 日）

公開パネルディスカッション

“The Evaluation of Asian Diplomatic Policies: The Middle East: Experience in Japan, Korea, and China”

第 2 日目（2006 年 5 月 14 日）

3-4 パネルを予定。パネル案や報告は、広く会員の提案を募ります。

詳細および報告者募集要項は、以下の英文での案内をご覧ください。

【連絡先】 日本中東学会国際交流委員会
(AFMA 東京大会実行委員長 酒井 啓子)

E-mail: afma2006may@yahoo.co.jp

FAX: 042-330-5543

郵送の場合は、

〒183-8534 東京都府中市朝日町 3-11-1

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 飯塚正人研究室気付

日本中東学会事務局

6th AFMA Conference in Tokyo

Tokyo University of Foreign Studies

13-14 May 2006

JAMES holds the presidency of AFMA
in 2005-2006

The New President of AFMA

The 21st Annual Conference of JAMES (Japan Association for Middle East Studies) was held in the National Museum of Ethnology, Suita, Osaka on May 14-15, 2005. In the general meeting, the new Board of Directors was announced, under the new presidency of Prof. Toru MIURA, Ochanomizu University. Prof. MIURA will act as a president of AFMA until 2006.

AFMA President's Address

The rising of Middle East studies in East Asia has now attracted the attention of the World. The members of AFMA have participated in international conferences such as WOCMES in Mainz (2002), and the MELA (Middle East Librarians Association) held in the special session "The View from the East: Middle East Library Collections in East, South, and Australasia" at the MESA annual meeting in 2003.

AFMA's activities have now reached the 2nd stage, ending the first rotation of the presidency among KAMES, CAMES and JAMES. At the AFMA Council Meeting at Pusan in 2004, the membership of MAMES was approved, and MAMES will have the next presidency after JAMES.

The 6th AFMA Conference will be held in Tokyo in May 2006 on the theme of "Middle East Perspectives from East Asia." The relations between the Middle East and East Asia have a long tradition from early times, and are becoming stronger and more complex in the fields of politics, economics and culture. Middle East Studies has often been separated from Asian Studies in Europe, USA and East Asia, as well in terms of research organization. However, we can now find new approaches to Middle East Studies by discussing past and present relations between the Middle East and East Asia from comparative viewpoints. We look forward to your participation in the development of Middle East and Islamic Studies at this turning point in the globalization of world societies.

Toru MIURA, President of JAMES and AFMA
Professor of Ochanomizu University (Tokyo).

(Please see also the JAMES Presidential Address in 2005 "The 21st Year of JAMES," posted at the JAMES website, in order to know more about the activities of JAMES.)

The 6th AFMA Conference in Tokyo, 13-14 May 2006:
"Middle East Perspectives from East Asia: Diversifying the Middle East and Islamic Studies"

In the year 2006, the 6th Asian Federation of Middle East Studies Associations Conference (AFMA) will be held in Tokyo at the Tokyo University of Foreign Studies campus on 13-14 May under the title "Middle East Perspectives from East Asia: Diversifying the Middle East and Islamic Studies."

TENTATIVE PROGRAMME

First Day (13 May 2006)

Open Panel Discussion: The Evaluation of Asian Diplomatic Policies: The Middle East: Experience in Japan, Korea, and China

(Panelists to be determined from members of AFMA)

(Discussants to be determined from AFMA and other organizations)

Second Day (14 May 2006)

3-4 Panels are to be held.

The subjects of these panels might be the following:

1. Democratization in the Middle East: Comparative Viewpoints from East Asia
2. The Understanding of the Middle East from East Asia: Cultural and Social Communication
3. The Middle East and East Asia in Global History

We welcome any offer from the members of AFMA to organize panels or to give presentations.

See the “Call for Papers” below.

Location:

Tokyo University of Foreign Studies

Fuchu-shi Asahi-cho 3-11-1, Tokyo, 183-8534, Japan

How to Participate in the AFMA Conference:

I. For members of AFMA (JAMES, KAMES, CAMES, and MAMES):

A. Call for Papers

A (1) If you want to present a paper and would like us to place you on a panel, please provide the following information:

- Your affiliation, postal address, telephone and fax numbers, and e-mail address
- Title and an abstract of approximately 100-150 words about your paper

A (2) If you wish to convene a panel, please provide the following information:

- Panel title
- Statement of the purpose of the panel within 150 words
- Affiliations, postal addresses, telephone and fax numbers, and e-mail addresses of the chair and discussant (if there is one) and the paper presenters
- Title and an abstract of approximately 100 words for each paper

DEADLINE for ABSTRACTS: 30 September, 2005

B. ATTENDANCE

If you wish to attend, please provide the following information:

- Statement of interest
- Affiliation, postal address, telephone and fax numbers, and e-mail address

DEADLINE: 31 December, 2005

II For those who are not AFMA members:

A. DISCUSSANTS and COMMENTATORS

If you wish to attend as a discussant or commentator on one of the planned panels, please provide the following information:

- Statement about which panel you are going to participate
- Affiliation, postal address, telephone and fax numbers, and e-mail address

DEADLINE: 31 December, 2005

B. ATTENDANCE

If you wish to attend, please provide the following information:

- Statement of interest
- Affiliation, postal address, telephone and fax numbers, and e-mail address

DEADLINE: 31 December, 2005

Cost of Registration: To be announced

Accommodations: JAMES may receive some financial support to cover expenses for a limited number of paper presenters in Tokyo. Further information will be provided in October.

Contact: Executive Committee for the 6th AFMA Conference,

E-mail: afma2006may@yahoo.co.jp

FAX: 042-330-5543

c/o Prof. Masato IIZUKA

Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa,

Tokyo University of Foreign Studies

Fuchu-shi Asahi-cho 3-11-1, Tokyo, 183-8534, Japan

第 2 回中東学会世界大会 (アンマン) パネル募集のお知らせ

2006 年 6 月 11 ~ 16 日、アンマンにおいてヨルダン王立宗教学研究研究所 (RIIFS) の主催で、第 2 回中東学会世界大会 (Second World Congress for Middle Eastern Studies : WOCMES-2) が開催されます。WOCMES 大会は 4 年に一度開催されることになっており、第 1 回大会はドイツのマインツで 2002 年に開催され、日本中東学会では、国際交流基金の事業助成をえて “ Sufi-Saints and Non-Sufi Saints ” のパネルを組織し、学会のブースを設けました (ニューズレター 92 号参照)。

現在、WOCMES アンマン大会実行委員会では、研究発表、パネル、ラウンドテーブルの募集を行っています。大会実行委員会は、大会での報告希望者は事前に組織されたパネルのかたちで参加することを強く推奨しております。発表だけの応募の場合は、発表するパネルを実行委員会が割り当てることになるようです。

発表等をご希望の方は必ず参加の事前登録を行い、パネルやペーパー等の要旨を 2006 年 2 月 15 日までに提出することになります。使用言語は英語ですが、フランス語、アラビア語でも可能です。

なお、事前参加登録料は 2005 年 7 月 31 日までは割引が適用され、一般 95 \$、

学生 65 \$、それ以降が一般 130 \$、学生が 95 \$ となっています。詳細は WOCMES-2 のホームページ (http://www.riifs.org/wocmes2/about_wocmes2.htm) をご覧ください。

WOCMES-2 に関し、日本中東学会国際交流委員会としては、世界大の中東研究の交流を進めるために、AJAMES などの出版物を展示する学会ブースを設けるとともに、JAMES 会員による発表や国際パネルの組織に積極的に協力していきたいと考えています。

そこで、会員の方から特にこのようなテーマでパネルまたはラウンドテーブルを組んでみたいという予定や提案、あるいはパネルは自分では組織しないが個人として研究発表をしたいという予定がございましたら、7月31日までに下記のメールアドレスまでご連絡ください。ご連絡に応じて、国際交流委員会において情報の交換を行い、近年の日本の中東研究の動向を発信することを考慮して、様々な提案を含め、パネルの組織などのお手伝いをしたいと考えています。

なお、繰り返しになりますが、パネル組織にせよ個人の研究発表にせよ、事前登録が条件になっていますので、これについては個人単位で上記ホームページをみて登録をしていただけるようお願いいたします。

【連絡先】 日本中東学会国際交流委員会 白杵 陽
E-mail: usuki956@idc.minpaku.ac.jp

理事会・総会報告

【第2回理事会報告】

5月14日(土) 国立民族学博物館第3演習室において2005年度第2回理事会が開催されました。概要は以下の通りです(議題の詳細については11~14ページの総会報告をご参照ください)。

出席：三浦徹会長、飯塚正人、白杵陽、加藤博、栗田禎子、小杉泰、小松久男、
酒井啓子、長沢栄治、林佳世子の各理事
旧事務局より帯谷知可会員

欠席：赤堀雅幸理事

・特任理事として赤堀雅幸、栗田禎子両会員の指名が承認された。

[議題]

1. 2005 年度事業計画について
2. AJAMES の 2005 年度編集計画について
3. 国際交流委員会の活動について
4. 2005 年度公開講演会および学校教育における中東理解の推進について
5. 2004 年度決算報告、2005 年度予算案
6. 会員動向
7. 2006 年度年次大会・AFMA 大会について
8. その他

【日本中東学会第 21 回年次総会報告】

日時：2005 年 5 月 14 日（土）

場所：国立民族学博物館 講堂

出席者：78 名、委任状提出 141 名、計 219 名（定足数 134 名）

水島多喜男会員の司会により、議長として松本弘会員、書記として北澤義之、鷹木恵子両会員、議事録署名人として森本一夫、山口昭彦両会員が選出されました。理事会によって提出された以下の議案が審議され、いずれも採択されました。

1. 2004 年度事業報告

臼杵陽旧事務局長から概要報告の後、必要に応じて各担当理事から報告が行われた。

- ・ 第 20 回年次大会の開催（2004 年 5 月 8 日～9 日、明治大学）
- ・ 第 8 回公開講演会「中東における紛争と平和構築」の開催（2004 年 10 月 30 日、一橋記念講堂、文部科学省科学研究費補助金・研究成果公開促進費の助成による）
- ・ 日本中東学会年報(AJAMES)第 20-1 号、第 20-2 号の編集・出版（日本学術振興会科学研究費補助金・研究成果公開促進費の助成による）
- ・ AFMA プサン大会（2004 年 10 月 15 日～17 日）への会員派遣・パネルの組織および研究報告（国際交流基金・中東交流事業の助成による）
- ・ 第 19 回国際宗教学宗教史会議世界大会（2005 年 3 月 24～30 日）への協力とパネルの組織。
- ・ 「日本における中東研究文献データベース 1989-2003」のための日本オリエント学会、日本イスラム協会会員への照会調査およびデータベースの拡充。同英語版の編集掲載（日本学術振興会科学研究費補助金・研究成果公開促進費の助成による）
- ・ ニュースレターの発行（和文 4 回〔総頁数 102 頁〕、英文 1 回〔28 頁〕）
- ・ 学会ホームページおよび会員メーリングリストによる広報（2004 年度配信

- 136 件、登録者数 473 名)
- ・ AJAMES の海外機関への発送。
 - ・ 会員数の増減： 入会者 52 名、退会者 5 名 / うち物故者 2 名。結果、2005 年 3 月 31 日現在の会員数は 672 名 (正会員 520 名 ; 学生会員 152 名) となった。
 - ・ 第 11 期役員選挙の実施。
2. AJAMES 第 20-1 号、第 20-2 号編集報告 (長沢栄治 AJAMES 編集委員長)
- ・ 20-1 号および 20-2 号が予定通り刊行されたが、20-2 号の発送が遅れたことについてお詫びがあった。また投稿原稿が増え、年報内容の充実が図られた一方、日本語の頁数が増加したために直接出版費が 2,471 千円から 2,982 千円に増えるなど、結果として学会予算を圧迫したことについて説明があった。なお、外国語率は全体として 57% に留まった。 (30 ページに関連記事)
3. 2004 年度決算報告 (臼杵陽旧事務局長) および監査報告 (江川ひかり監事) (決算については 15 ページの表を参照)
- ・ AJAMES 編集費・欧文校閲費・印刷製本費、およびニュースレター発行費、消耗品費 (封筒等) が予算を超過した。
 - ・ 他方、AJAMES / ニュースレター発送費、会議費、交通費などは予算を下回り、また大会会場費として計上していた 20 万円が大会実行委員会の尽力によって無料となるなど、節約できた費目もあった。
 - ・ 繰越金は 2004 年度に比べ約 50 万円減となった。
 - ・ 江川ひかり監事より、高階美行監事とともに会計監査を行い、決算についてはすべて適正であった旨の報告があった後、AJAMES 編集費が予算を大きく超過した点についてあらためて総会での説明が求められ、長沢担当理事による補足説明が了承された。
4. 第 11 期役員選挙報告および理事の任務分掌、特任理事・監事の選出について
- ・ 菊池忠純選挙管理委員長より、第 11 期評議員選挙および理事選挙の結果 (ニュースレター 102 号に記載の通り) が報告された。
 - ・ 飯塚正人新事務局長より、選出理事の任務分掌 (ニュースレター 103 号に記載の通り) について報告があった後、会員数の増加による理事会業務の増加に対応し、国際大会の準備・開催、また国際交流推進のために、赤堀雅幸、栗田禎子両会員を特任理事として選出したい旨の提案があった。また、監事として清水学、山下王世両会員が推挙され、両案ともに総会の承認が求められた。

(質疑) 理事選挙が 54% の低投票率に留まり、無効投票も多かったのはなぜかとの質問があり、菊池選挙管理委員長から、今回は投票期間が短かったことが投票率に影響し、記入ミスのために無効投票が多くなったと説明された。

5. 2005 年度事業計画一般について

飯塚正人新事務局長から概要説明の後、必要に応じて各担当理事から報告が行われた。

- ・ 第 21 回年次大会の開催 (2005 年 5 月 14 ~ 15 日、国立民族学博物館)
- ・ 第 9 回公開講演会「中東と日本の間」の開催 (2005 年 11 月 5 日、明治大学リバティホール、文部科学省科学研究費補助金・研究成果公開促進費の助成を受ける)
- ・ 日本中東学会年報 (AJAMES) 第 21-1 号、第 21-2 号の編集・出版を行う (日本学術振興会科学研究費補助金・研究成果公開促進費の助成を受ける)
- ・ アジア中東学会連合 (AFMA) 第 6 回大会 (2006 年 5 月、日本) 開催のため、実行委員会を組織して準備にあたる (日本学術振興会に国際研究集会の助成を申請する)。来年 5 月に開催される第 22 回年次大会と同会場で同時並行的に AFMA 大会を開催し、通常の年次大会は日本語、AFMA は英語でのパネルを企画する予定。
- ・ 第 2 回中東学会世界大会 (WOCMES-2、2006 年 6 月アンマン) においてパネルを組織する方向での協力準備。
- ・ 「日本における中東研究文献データベース 1989-2005」(日本語版、英語版) 新規業績の調査・更新、学会ホームページにおける公開・維持・更新。
- ・ ニュースレターの発行。
- ・ 学会ホームページおよび会員メーリングリストによる広報。
- ・ 海外の関連学会との交流の促進。
- ・ AJAMES の普及を促進するための電子ジャーナル化。
- ・ 20 周年記念事業として、日本中東学会奨励賞を設置する。目的は会員の研究業績を国際的に広く発信すること、特に若手中東研究者による国際的水準に達する論文執筆の促進に置く。選考委員会は理事会とは別に設置する。

(質疑) 来年度の年次大会と AFMA 大会における使用言語について、年次大会では日本語使用、AFMA 大会では英語使用と分けるのは、国際交流の観点から後退ではないかとの質問があり、酒井担当理事から、年次大会は通常通り行い、同時並行で AFMA 大会を開催する、そこでは英語が共通言語として用いられるが、同じ会場で開催することから会員はどちらにも自由に参加できる形をとるので、国際交流を推進すべく積極的に AFMA 大会に参加して欲しいとの回答があった。

6. AJAMES 第 21-1 号、21-2 号編集計画（長沢栄治 AJAMES 編集委員長：議題の詳細については 30～32 ページの AJAMES 編集委員会報告をご覧ください）
 - ・ 編集委員の交代。
 - ・ 日本学術振興会科学研究費補助金・研究成果公開促進費（学術定期刊行物）の複数年（4 年間）の内定。
 - ・ AJAMES の電子ジャーナル化と国立情報学研究所電子図書館上での公開。
 - ・ AJAMES 刊行月の変更（ニューズレター103号掲載の通り）。
 - ・ 第 21-1 号、21-2 号特集計画。
 - ・ 新コーナー企画。
 - ・ 外国語での投稿・特集企画の依頼。

7. 2005 年度予算案（飯塚正人新事務局長）（予算案については 15 ページの表を参照）
 - ・ 収入の部で、AJAMES 広告費が 04 年度に比べ倍額になっているのは、04 年度分の振込が遅れた分を含めているためである。
 - ・ AFMA と WOCMES の国際大会準備のため、国際交流費に昨年の倍額 20 万円を計上した。
 - ・ 事務局移転費として 5 万円が計上されているが、他方、東京に事務局が移るため、交通費は減額になっている。
 - ・ 大会会場費が今年度は無料であったため、20 万円の節約ができた。
 - ・ 新たに学会奨励賞運営費として、選考委員の交通費など 5 万円を計上した。（質疑）賛助会員がいない現状を残念に思うとの意見表明があり、理事会として賛助会員を獲得する方向で今年度は努力したい、関連情報の提供を会員にもお願いしたいとの回答があった。

また、2005 年度への繰越金決算額が 2004 年度予算に比べて約 275 万円も少なくなっている最大の原因は、年会費収入が予算よりも約 220 万円少ない数字に留まったからではないか、2005 年度予算の年会費収入は確実な数字なのかとの質問があった。年会費収入に関しては現在会費未納分が 2,392,000 円もあり、全額回収が困難なのは事実であるが、全額回収に向けて努力するという意志を込めて、理事会では毎年度、未納分全額を会費収入に含め予算計上してきた、昨年はかなり多くの額を回収できたが、未納分全額の回収は難しく、実際には予算案よりも少ない収入に留まるとの見通しのうえで、支出計画を作成しているとの説明があった。

三浦徹新会長からの挨拶があり、以上をもって総会は閉会されました。

2004年度決算

収入	04年度予算	04年度決算
2003年度よりの繰越金	3,440,344	3,440,344
年会費	6,960,000	4,736,000
2000年度分	0	8,000
2001年度分	0	0
2002年度分	364,000	56,000
2003年度分	624,000	196,000
2004年度分	1,492,000	1,096,000
2005年度以降分	4,480,000	3,380,000
その他	1,470,100	1,413,113
科研費出版助成金	1,200,000	1,200,000
利子	100	9
AJAMES販売代金	200,000	70,900
AJAMES広告費	50,000	0
海外郵送費実費	20,000	21,680
第20回年次大会実行委員会から寄付	0	120,524
収入合計	11,870,444	9,589,457
公開講演会科研費	550,000	550,000
中東研究文献DB科研費	3,500,000	3,500,011

2005年度への繰越金内訳

2005年度予算

収入	05年度予算	04年度予算
2003年度よりの繰越金		3,440,344
2004年度よりの繰越金	2,925,692	
年会費	6,880,000	6,960,000
正・学生会員	6,880,000	6,960,000
2002年度分	200,000	364,000
2003年度分	312,000	624,000
2004年度分	552,000	1,492,000
2005年度分	1,328,000	4,480,000
2006年度分	4,488,000	0
賛助会員	0	0
その他	1,520,100	1,470,100
科研費出版助成金	1,200,000	1,200,000
利子	100	100
AJAMES販売代金	200,000	200,000
海外郵送費実費	20,000	20,000
AJAMES広告費	100,000	50,000
収入合計	11,325,792	11,870,444

公開講演会科研費 620,000 550,000
 中東研究文献DB科研費 0 3,500,000

支出	04年度予算	04年度決算
事務局費	1,260,000	1,170,880
アルバイト謝金	900,000	867,080
通信費	50,000	12,070
消耗品費	100,000	145,228
会議費	100,000	39,092
交通費	100,000	78,080
振込手数料	10,000	5,965
学会事務センター関連負担	0	23,365
事業費	4,950,000	5,492,885
大会開催費	300,000	300,000
大会会場費	200,000	0
AJAMES20号編集費	250,000	325,720
欧文校閲費	300,000	581,704
同印刷製本費	2,300,000	2,991,114
編集委員会交通費	100,000	54,080
NL発行費	400,000	597,712
AJAMES/NL発送費	500,000	372,655
AJAMES海外発送費	100,000	68,880
選挙費用	50,000	83,370
国際交流費	100,000	21,320
インターネット広報費	200,000	73,005
WOCMES	0	0
AFMA	100,000	0
公開講演会広報など	50,000	23,325
支出合計	6,210,000	6,663,765
2005年度への繰越金	5,660,444	2,925,692
総計	11,870,444	9,589,457

支出	05年度予算	04年度予算
事務局費	1,210,000	1,260,000
アルバイト謝金	900,000	900,000
通信費	50,000	50,000
消耗品費	100,000	100,000
会議費	50,000	100,000
交通費	50,000	100,000
振込手数料	10,000	10,000
事務局移転費	50,000	0
事業費	5,350,000	4,950,000
大会開催費	300,000	300,000
大会会場費	0	200,000
AJAMES21号編集費	250,000	250,000
同欧文校閲費	400,000	300,000
同印刷製本費	2,700,000	2,300,000
編集委員会交通費	150,000	100,000
NL発行費	400,000	400,000
AJAMES/NL発送費	500,000	500,000
AJAMES海外発送費	100,000	100,000
選挙費用	0	50,000
国際交流費	200,000	100,000
インターネット広報費	150,000	200,000
AFMA	0	100,000
公開講演会開催費	50,000	50,000
学会奨励賞運営費	50,000	0
中東文献DB更新費	100,000	0
支出合計	6,560,000	6,210,000
2005年度への繰越金		5,660,444
2006年度への繰越金	4,765,792	0
総計	11,325,792	11,870,444

第 21 回年次大会報告

【大会プログラム】

- 5月14日(土) パネル1・2、総会(国立民族学博物館 講堂)
- 12:00 受付開始
- 13:30 開会の辞(大会実行委員長 松原正毅)
- 13:40~15:10 パネル1「メディアの見た中東の20年」(一般公開)
- パネリスト 平山健太郎(元NHK解説委員)
広河隆一(フォトジャーナリスト)
モスタファー・レズラズィー(元アル・ジャジーラ東京支局長)
- 司会・レスポネント 酒井啓子(日本貿易振興機構アジア経済研究所)
- 15:30~17:15 パネル2「中東研究の大技・小技」
- パネリスト 大塚和夫(東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所：人類学)
高階美行(大阪外国語大学：アラビア語学・教育)
堀川徹(京都外国語大学：歴史学)
- 司会・レスポネント 西尾哲夫(国立民族学博物館)
- 17:30~18:20 日本中東学会総会
- 18:30~20:00 懇親会(レストランみんぱく)
- 5月15日(日) 研究発表
- 午前の部 10:00~12:10
- 午後の部 13:00~16:50(休憩 15:10~15:25)

分科会1(第3セミナー室)

- 1) 宮崎 元裕(京都大学研修員)
「トルコにおける大学入試：高校間の入試結果の差異に注目して」
- 2) 丸山 英樹(国立教育政策研究所国際研究・協力部)
「現代トルコの学力問題と教育改革」
- 3) 森田 豊子(大阪外国語大学・鹿児島大学非常勤講師)
「ハータミー期イランの学校教育における教師の役割の変化」
- 4) 小島 宏(国立社会保障・人口問題研究所)
「在日外国人『ムスリム』の人口学的特性の変動」
- 5) 飛奈 裕美(京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科博士課程)

- 「インテリゲンチヤダ期パレスチナの『子ども』のポリティクスとその可能性」
- 6) Hee Soo Lee (Department of Cultural Anthropology, Hanyang University)
 “ The 9.11 Event and New Approach to Islam and the Middle East in Korean Society ”
- 7) 武石 礼司 (富士通総研経済研究所主席研究員)
 「サウジアラビア経済の構造分析」
- 8) 上山 一 (一橋大学大学院経済学研究科博士課程)
 「イスラム銀行論：無利子金融の実態について」

分科会 2 (第 4 セミナー室)

- 1) 井家 晴子 (東京大学大学院総合文化研究科博士課程、日本学術振興会特別研究員)
 「移民と『ジャムイーヤ (Jam'īya)』：モロッコ王国における NGO の発展と背景」
- 2) 若松 大樹 (上智大学大学院外国語学研究科博士後期課程)
 「現代トルコにおけるアレヴィーリッキ：ネヴルーズ祭を通して」
- 3) 今堀 恵美 (東京都立大学大学院社会科学研究科博士課程)
 「ウズベキスタン商業刺繍屋の活動：ブハラ州ショーフィルコーン地区を事例として」
- 4) 上野 雅由樹 (東京大学大学院総合文化研究科博士課程)
 「オスマン帝国下のアルメニア教会における司祭叙階問題」
- 5) 宇野 陽子 (津田塾大学大学院国際関係学研究科後期博士課程)
 「第一期トルコ大国民議会における反主流派『第二グループ』：1923 年選挙を中心に」
- 6) 黛 秋津 (日本学術振興会特別研究員)
 「国際政治から見たバルカン在地勢力：18 世紀末のドナウ岸都市ヴィディンのアーヤーンを例として」
- 7) Arezoo Fakhrejahani (東京工業大学大学院博士課程)
 “System of Islamic Tax (Vujihat) in Shia: Reviewing the Relation between Individual/Religion/Nation in Modern Iran”
- 8) 吉村 貴之 (東京外国語大学非常勤講師、日本学術振興会特別研究員)
 「ソヴィエト・アルメニアと在外同胞：1920 年代初頭を中心に」

分科会 3 (第 5 セミナー室)

- 1) 茂木 明石 (上智大学大学院外国語学研究科地域研究専攻博士後期課程)
 「イマーム・シャーフィイー (767-820) の『聖者』像の形成：10 世紀から 15 世紀を中心に」

- 2) 守川 知子 (日本学術振興会特別研究員)
「死者たちの聖地参詣」
- 3) 橋爪 烈 (東京大学大学院人文社会系研究科博士課程)
「アッバース朝前期におけるバイアとカリフ位」
- 4) 外山 健二 (筑波大学大学院人文社会科学研究科博士課程)
「地図とマジョルカ島：<天上学>と<地上学>の展開」
- 5) 亀谷 学 (北海道大学大学院文学研究科博士後期課程)
「初期イスラーム時代におけるカリフ概念の再検討：称号としての『神の僕』を手がかりに」
- 6) 原山 隆広 (東京大学大学院人文社会系研究科博士課程)
「11世紀後半における『スルターン』概念の変遷：アッバース朝とセルジューク朝の交渉事例より」
- 7) 熊倉 和歌子 (お茶の水女子大学大学院人間文化研究科博士後期課程)
「15世紀マムルーク朝における私的土地所有の展開と国家政策」

分科会4 (第7セミナー室)

- 1) 小副川 琢 (東京外国語大学 AA 研共同研究員、放送大学非常勤講師)
「内戦終結後におけるヒズブッラーの武装闘争とレバノン政府の対処」
- 2) 青山 弘之 (JETRO アジア経済研究所地域研究センター研究員)
「シリアにおけるクルド問題：差別・抑圧の『制度化』」
- 3) 吉川 卓郎 (立命館大学経営学部非常勤講師)
「ヨルダン立法府『改革』の15年：1989年以降の下院における政府介入・調整の構造」
- 4) Ghanim Al-Jumaily (Ambassador of the Republic of Iraq to Japan)
“ Toward a Strong Partnership between Japan and Iraq ”
- 5) 高橋 陽子 (早稲田大学人間科学学術院助手)
「戦後イラクのメディア」
- 6) 横田 貴之 (日本国際問題研究所研究員)
「現代エジプトにおけるムスリム同胞団の諸活動と改革イニシアティブ」
- 7) 大島 史 (東京外国語大学大学院地域文化研究科博士後期課程)
「トルコ民族主義とイスラーム：1970年代民族主義者行動党のイスラーム政策を中心に」
- 8) Ahmad Kandil (上智大学大学院博士課程)
“The Cooperation between Japan and Saudi Arabia: The Arabian Oil Company as a Case Study”

分科会 5 (第 6 セミナー室)

アラビア語セッション 10:00 ~ 11:25 (発表および質疑はアラビア語)

司会 岡本久美子

1) Samy Ahmad Sulayman (大阪外国語大学外国人教師)

“ Muthaqqaf al-Nahḍa al-‘Arabiyya wa-Ta’ṣīl al-Anwā’ al-Adabiyya al-Ḥadītha fī al-Qarn al-Tāsi’a ‘Ashara ” (アラブ覚醒(ナフダ)期の知識人と 19 世紀における近代的文学ジャンルの定着)

2) 鷺見 朗子 (京都ノートルダム女子大学助教授)

“ Waṣf al-‘Imārah fī Sīniyyat Aḥmad Shawqī ” (アフマド・シャウキーのシーニヤにおける建築物の描写)

3) Ibrahim Ado-Kurawa (ナイジェリア・カノ州知事特別研究アシスタント)

“ Muslim Scholars and Interpretations of Islam in Kano: Affiliation and Position ”

4) 森下 信子 (東京大学大学院人文社会系研究科博士課程、日本学術振興会特別研究員)

「イスラム思想 10 ~ 11 世紀における寓意的作品: 『ケベースの絵馬』とイブン・シーナーの 『ヤクザーンの子ハイイ物語』」

5) ギュレチ・セリム・ユジェル (京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科博士課程)

「現代トルコにおけるスーフィー思想家: ジョシャン師の活動と思想をめぐって」

6) 依田 純和 (大阪外国語大学非常勤講師)

「15 世紀東部マグリブ定住民方言の短母音組織の考察: チュニスの Lahṅ al-‘Āmmah 文献 “ al-Jumānah fī ‘Izālat al-Raṭānah ” とマルタの詩 “ Cantilena ” を資料として」

7) 前田 君江 (東京外国語大学 AA 研共同研究員)

「アフマド・シャームルーの 『非韻律詩』 she‘r-e mansur の詩学」

8) 森口 明美 (大阪外国語大学非常勤講師)

「コーランのアラビア語における条件詞 law の分析: 古典アラビア語成立過程の解明に向けて」

【主催機関から】

大会実行副委員長 白杵 陽 (国立民族学博物館)

第 21 回日本中東学会年次大会は国立民族学博物館および地域研究コンソーシアム (特にパネルディスカッション 1 「メディアの見た中東の 20 年」に対して) の共催を得て成功裏に終わることができました。これも 157 名の会員の皆様と 39

名の新入会員および非会員の方々にご参加頂いて、すばらしい報告と熱のこもった議論が行われたからだと思います。

第一日は日本中東学会 20 周年の記念行事として「メディアの見た中東の 20 年」と「中東研究の大技・小技」の二つのパネルディスカッションが行われました。夕方には懇親会がレストランみんぱくで行われ 100 名以上の方々がご参加下さり、たいへん盛り上がりました。また、二日目は例年のように 5 つの分科会に別れて、合計 38 本の報告が行われました。特筆すべき点としては、ジュマイリー駐日イラク大使が来阪して報告を行い、アラビア語セッションも前回に引き続き行われたことです。

最後に、松園万亀雄・国立民族学博物館館長および押川文子・地域研究企画交流センター長には物心両面からご支援をたまわりました。実行委員会を代表しまして深謝申し上げます。また、大会事務局として大会の準備と運営に奔走してくれた池田有日子、末近浩太、福田義昭の三氏（五十音順）、そして縁の下の力持ちとして大会のロジを助けてくれたアルバイトの院生諸君には、そのご苦勞に対して心からお礼を申し上げる次第です。

【パネル 1 メディアの見た中東の 20 年】

5 月 14 日、1 時 40 分から実施された公開パネルディスカッションは、日本中東学会 20 周年を記念して「メディアの見た中東の 20 年」とのテーマで行われた。パネリストには、NHK で長年記者、論説委員として中東を取材、解説し続けてきた平山健太郎・白鷗大学客員教授と、パレスチナ、イラクを始めとした中東各地の紛争の被害者の姿をとり続け、昨年 DAYS JAPAN を発刊したフォト・ジャーナリストの広河隆一氏、そして元アルジャズィーラ放送の東京支局長で現在メディア・ネットワーク代表のモスタファー・レズラーズィー氏の三名を迎えた。

まず平山氏から、自らの中東取材経験と中東現代史を重ね合わせながらの報告があり、体験談に基づく生々しい歴史の証言を堪能することができた。続いて広河氏の報告では、紛争、抑圧の被害者の立場に立った報道のあり方が論じられ、氏が撮り続けてきたイラクやアフガニスタン、パレスチナの映像が会場に映し出された。レズラーズィー氏は現在の中東のメディアのありようと中東のジャーナリストから見た日本の報道を論じた。それぞれの報告のあと、パネリストの間で、特に広河氏の提示した「マスメディアが（従軍取材のように）加害者側に立った報道に拠りがちなものに対して、フリーランスは被害者の立場に立つ」といった視点を巡り、活発な討論が行われた。密度の濃い報告と討論が展開されたことで、残念ながらフロアとの間での質疑、意見交換に割く時間がなくなりましたが、日本における中東報道の今後のあり方を考える上で、さまざまな論点の提起された、意義深いパネルとなった。

（酒井 啓子）

【パネル2 中東研究の大技・小技】

本企画は、日本中東学会発足 20 年をひとつの区切りとして、中東研究を振り返るものである。中東地域を研究対象とする文化人類学、アラビア語学・教育、歴史学をはじめとする学問分野から、大塚和夫氏（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所）、高階美行氏（大阪外国語大学）、堀川徹氏（京都外国語大学）の三名に報告をしていただいた。これら三名は各専門分野において現在の中東研究をリードされており、全員がいわゆる団塊の世代に属している。その意味では、戦後日本における教育と学問の動向を体現してきた世代であるとも言えるだろう。まず、地域研究としての文化人類学は他のディシプリンに比して理論的動向や一般化に敏感であるが、大塚氏の言によれば、中東イスラム世界の文化人類学的内容の講義に際しては、人類学専攻の学生よりも、他の歴史学や政治学等で中東研究を志す学生の方が高い関心を示すとのことである。続いて高階氏は戦後のアラビア語教育の制度面での拡充について統計的なデータを整理した。同氏の報告によれば、石油ショックによって大学におけるアラビア語教育が充実し、さらには 9・11 事件が契機となって多くの大学でアラビア語を学べるようになったが、欧米における中東諸語の教育水準に比べてスタンダードな部分における教育方法は依然として確立されておらず、今後の課題としてアラビア語検定のような教育面での方策が必要である。最後に堀川氏は、研究者の自己申告が地域研究というディシプリンに収斂している最近の傾向において、文献批判を基本とした文書研究の重要性をあらためて指摘し、歴史資料からの析出結果と当該地域の現代的状況を動態的に接合させるような視点が、たとえ研究者の偶然の出会いであったとしても肝要であるとした。

三人の報告に共通するのは、中東地域研究という場において学際的なアプローチが望ましいはずであるが、それぞれのディシプリンの研究動向に精通した専門性の高い研究が増加する一方で、全体的現実としての中東世界に関心を向け、貪欲に他の研究領域の成果を取り込むような面が少なくなっているという指摘であった。

(西尾 哲夫)

【研究発表会場から】

分科会 1

分科会 1 の午前の部は、現在のトルコとイランの教育状況をテーマとする発表が続いた。宮崎元裕氏は、トルコにおける大学入試の実態を 2004 年度のデータをもとに詳細に論じた。トルコでは、1981 年から大学入試センターが統一試験の実施から各大学の各学科の合格者決定までを一括して決定する中央集権的なシステムが採用されている。宮崎氏は、このシステムのもとで、普通高校や職業高校の

生徒がどのように選抜され、各学科に振り分けられていくのかについて詳説するとともに、この制度のもつ特徴や問題点を指摘した。丸山英樹氏は、OECD が生徒（15 歳児）を対象に実施している学習到達度調査（PISA）におけるトルコの結果（2003 年）を紹介しながら、トルコの義務教育が抱える問題点を詳説した。さらに丸山氏は、EU 加盟に向けて、トルコが実施している教育改革の動向を紹介するとともに、改革のための取り組みが、教育の質的向上に寄与するものかどうかについて分析した。森田豊子氏は、1979 年のイスラーム革命から現在までのイランの教育を、教師の役割という視点から論じた。革命以後、教育省の教科教育部門と道徳倫理教育部門が分離されたために、各学校に教科教員とは別に道徳倫理教員が配置されてきたが、2001 年に両部門が統合され、道徳倫理教員の廃止が決まった。森田氏は、革命後に両部門が分離された理由ならびに最近になって両部門が統合された理由を、1997 年以降顕著となるイラン社会の変化から説明した。

以上、トルコやイランの教育に関する貴重な発表により、両国の教育の現状がかなり明らかになったと思う。ただ、教育を専門としない聴衆に配慮し、当該社会の政治的社会的状況の中に教育的現象を位置づけるという工夫があれば、一層、魅力的なものとなったのではないかと感じる場面もあった。（桜井 啓子）

小島宏会員による報告は「在留外国人統計」（法務省）と「国勢調査」（総務庁統計局）の統計に基づいて在日外国人「ムスリム」の人口学的特性の変動を議論したものであった。1984 年から 2002 年までのムスリム総数は 8,400 人から 75,000 人にまで増え、外国人人口の 4%までに達し、92～97 年にはイラン人が最大人口数を誇り、それ以外の時期はインドネシア人が最大で、インドネシア人の男性比が低いという指摘は意外な盲点をついていた。

飛奈裕美会員はインティファダ期パレスチナをめぐる言説を手段とする政治を「こどものポリティクス」と呼んで、その成立と展開、こどもが犠牲者としての受動的な存在から証言・語りを通して「能動的な存在」として現われつつあることを報告した。ナージー・アル・アリー風の風刺画などの画像を利用するなど新たな領域を開拓しようとする意欲は高く評価するが、もう少し多く具体的な素材を提示して論証すればより興味深い報告となっただろう。

韓国中東学会から派遣された Hee Soo Lee は、9・11 事件が韓国社会における中東イスラーム理解において転換点となり、反米感情と同時に親イスラーム感情も起こったという。こうした指摘は日本の状況と違って示唆的であった。とりわけ 3 年で 300 万米ドル規模の予算をもつ「中東イスラーム文明に関する 21 世紀プロジェクト」が 2002 年 7 月に立ち上がったということで、これは韓国中東学研究的発展にとって絶好の機会となるだろう。（臼杵 陽）

武石礼司「サウジアラビア経済の構造分析」は、石油依存経済の脆弱さという問題を抱えた同国が今後どのような政策をとっていくべきかという問題意識の

もと、展開された報告である。財政や国際収支の豊富な統計数値を用いて手堅く実証的にまとめられていた点が高く評価されるであろう。時間的配分としては、諸マクロデータの説明をもう少し削り、それらにあらわれている問題やそれら諸問題間の相互関係をいまい少し詳しく説明したほうがよかったのではないかと感じた。

上山「イスラム銀行論」は、イスラム無利子金融の実態を具体的に紹介したものであり、マレーシアやサウジアラビアでの現地調査などをも踏まえた意欲的研究として高く評価できるものであったが、無利子金融の経済学的・金融論的含意に説き及ぶ時間がなかった点が惜しまれる。（水田 正史）

分科会 2

井家晴子氏のモロッコ王国における NGO の発展と背景に関する発表では、1996 年以降に急増した「ジャムイーヤ」と呼ばれる NGO 団体のなかで、アイトイクテル開発協会という一団体の活動およびそのリーダー的存在の経歴を整理した。ただし、質疑でも指摘があったように、発表内容と結論あるいは論題とが結びつかず、論点が明確にならなかったことが悔やまれる。いくつかの主要「ジャムイーヤ」の成立基盤やネットワークが明示され、移民がいかにかかわり、移民の経験や知識がいかに移植されていくのか、そのことを反映して各「ジャムイーヤ」の活動が開発系、教育系、医療系等々に類別されるのでは？など、さらなる研究の発展に期待したい。若松大樹氏は、ネヴルーズ祭を通してアレヴィーリッキの構造の一端を明らかにするという目的でありながら、前提となるアレヴィーリッキの定義が詳細な検討に基づいてなされなかったことなど反省点が残った。トルコのみならず幅広い地域でおこなわれ、同時に政治的性格をもつ祭だけに、今後の成果が待たれる。今堀恵美氏は、ポスト・ソヴィエト時代に出現したブラハ州ショーフィルコーン地区における商業刺繍屋が、ソヴィエト時代のロシア風デザイン刺繍ではなく、それ以前の「アンティーク」と称される伝統的ブラハ刺繍のデザインおよび染色法を積極的に用いて地場産業として発展する実態を、もと教師であった一女性企業家による事業展開の事例から明らかにした。デザインや天然染料など「真正な」伝統を付与した「アンティーク」を売りに、国家の観光化推進政策の追い風にもあって、国際市場に果敢に挑むたくましい姿は、現在発展中の他地域における地場産業の「手本」ともなろう。「アンティーク」のデザインや染色そしてその「現代化」は、司会者に取り組んでいる遊牧民のじゅうたん製作にも共通する問題で、比較検討も有効であると思われる。（江川 ひかり）

上野雅由樹「オスマン帝国のアルメニア教会における司祭叙階問題」は、オスマン帝国下のアルメニア教会組織の改革問題を、司祭叙階に着目して報告した。1824 年と 1830 年の教会規定を丹念に読み込んだ発表内容は非常に手堅かったが、

時間の制約もあってか、アルメニア教会内部のヒエラルキー問題に集中し、教会を取り巻く当時の社会背景まで論を展開できなかった点が惜しまれる。会場からは、この点に関するコメントがいくつか寄せられた。

宇野陽子「第一期トルコ大国民議会における反主流派『第二グループ』」は、1923年選挙で反主流派の第二グループが惨敗し、ケマルのリーダーシップが議会で確立する過程を考察した。結論として、第二グループは議会内では無視できない影響力を持ったものの、議会外での活動の弱さ、グループ内の結束の脆さから選挙で敗北したとの見方が示された。聴衆から、この事例をトルコにおける野党発生メカニズムとして検証できるのではないかと、議員の出身地や背景について考慮すべきではないかと、などのコメントが寄せられた。

黛秋津「国際政治から見たバルカン在地勢力」は、オスマン帝国の国際関係中の一アクターとしてのアーヤーン（地方名望家）を、外交史料を用いて分析したものであった。コメントとして、論点の整理、テペデレンリ・アリ・バシャやメフメト・アリ・バシャの事例との比較、フランスやロシア、トルコ所蔵史料の併用の必要性などがあげられた。報告者は今後の参考として欲しい。

いずれも、一次史料等に依拠する手堅い内容だったが、手堅すぎという観もあった。大胆な仮説や枠組みの一端でも示されれば、活発な議論に結びついたのではないだろうか。個人的には、どの発表も魅力的で重要なテーマだと思うので、今後のさらなる発展と充実を期待する。（大河原 知樹）

分科会2の最終セッションでは、現代イランにおける喜捨と1920年代アルメニアをテーマとした2本の報告が行われた。最初の報告はArezzo Fakhrehjehaniによる日本語での報告で、シーア派の喜捨の中核をなすホムスについて、ハメネイ師やシスターニ師などのマルジャエ・タクリードの見解をリサーラやファトアを資料として比較した。とくにホムスの受け取り手、サイドへの支払い方法、災害におけるホムスの使い方について焦点をあて相違点を中心に論じ、最後にホムス論からみた宗教と国家の関係を考察した。

次の吉村貴之氏による報告は、1920年代初頭における領土としての実態が流動的なアルメニアをめぐる、ローザンヌ会議までのアルメニア・エリートを代表する民主自由党とソヴィエト・アルメニア政権が相互接近していく過程について、一次資料に多く依拠しながら考察した。とくに経済社会状況の不安定なソヴィエト・アルメニアが救済委員会を通して、民主社会党などに支援を要請し、また一方で民主自由党は、限られた可能性の中で、次第にソヴィエト・アルメニアをアルメニア人社会の中心として認めるようになっていった状況を明らかにした。

（池田 美佐子）

分科会3

第3分科会・午前部の二発表の司会を担当した。まず、茂木明石氏は「イマーム・シャーフィイー(767-820)の「聖者」像の形成」と題して発表した。ここでは、主として聖者列伝とシャーフィイーの伝記をもとに、系譜の整理、及びシャーフィイーにおける預言者ムハンマドの血筋の意味が検討された。今後、シャーフィイーが崇敬を集めるに至った社会的側面も検討されることであろう。

次いで、守川知子氏は「死者たちの聖地参詣」と題して報告。現イラクのアタバートへ多くの遺体が移葬され、現地で参詣など一定の儀礼を施されていたという慣行について詳細に分析した。会場からの質問が尽きぬほど興味深く、発表の質も高かった。図像資料も有効であった。(大稔 哲也)

橋爪氏の発表は、支配権を承認する契約行為で、特に君主と臣民の間に交わされ「忠誠の誓い」と訳されるバイアを、アッバース朝前期のカリフの事例で検証して、その不安定な継承の実態を明らかにし、逆に宗教性の増大によるカリフの権威の透明化を想定した。外山氏の発表は、中世キリスト教神学の「天上学」の所産たる TO 図とは違って、カタラン地図には、航海・天文学と並んで「地上学」としての地理学をも含んだ新しさを有しており、それを生み出したマジョルカ島立地とユダヤ教徒の活動を指摘した。亀谷氏の発表は、書簡文史料と銘文史料中で、カリフの名に附記される、神の僕(‘Abd Allah)と神の代理(Khalifat Allah)および信徒の長(Amiral Mu’minin)の3つの称号に注目し、一般ムスリムとカリフの間では「信徒の長」が、神とカリフの間では「神の僕」が主要なものであったが、第二次内乱期に神との直接接続性を強調するものとして「ハリーファ」が採用されるに至ったと推察した。(堀 直)

原山氏の発表は、アッバース朝とセルジューク朝の交渉事例を検討することにより11世紀後半における「スルターン」概念の変遷を確定しようとするものであった。史料に見られるカリフによる承認を構成する各要素(フトバ、貨幣、任命書、名誉のローブ、ラクブ)に注目して、関連する資料を精力的に検討し、「スルターン」制が名実ともに成立したのはマリクシャーの時代(1072-92)であったとする。1055年のトゥグルルベクにスルターンの称号を授与したことで成立したとする通説に疑問を呈する発表であった。具体的な政治状況をどう解釈するかについて質問があった。

熊倉氏の報告はマムルーク朝時代のイクター制の確立期以降の変容を15世紀の私的土地所有の展開に注目するとともに、国家財政の確立のための国有地の売却という政策に国家の積極的な政策という側面があることを論じたもの。それについては、私有地化の進展はそれ以前から見られるとともに、エジプトやシリアという地域差を考慮すべきだという意見が出された。官僚制度とその実態の探求を通じてより広い展開が期待される。(菊地 忠純)

分科会 4

小副川琢氏の報告は、レバノン政府の「主体」としての機能に着目し、特にターイフ合意以降のレバノン政府のヒズブッラーやシリアへの対応が検討された。司会者からの、主旨とは反対にレバノンのシリアに対する主体的行動の印象が薄かったのではとの質問に対し、報告者からは従属の程度の変化を問題にしているのであり、その辺の視点は重要であるとの説明があった。フロアからは、仮説としてヒズブッラーと政府の関係で望ましい状態をどう考えるかという質問があった。これに対しては、複合的現実主義モデルの中で解決するのが有効ではないかとの回答があった。青山弘之氏の報告は、04年3月のクルド人の「カーミシュリー事件」を契機に、現代シリア政治史におけるクルド問題の重要性を再認識し、それを差別・抑圧の制度化という観点から分析したものであった。シリア政府のクルド問題への望ましい対応方法はとの質問には、実現性の問題はあるが体制の民主化を含めた構造改革の中で解決するしかないのではとの返答があった。他にシリア政府の「アラブベルト」構想による差別の制度化の問題、遊牧民の動きとクルド人追放の動きの区別をめぐって質疑応答があった。他にも数名の質問者がいたが、時間切れとなった。吉川卓郎氏の報告では、ヨルダン立法府の改革に関する15年間の動向の整理と分析が行われた。問題点として多数の暫定法の解除が問題となるとの指摘があった。フロアからは選挙区、民主化とパレスチナ問題の関連、同国の政党の影響力と議会政治に関して活発な質疑応答があった。最後に報告者の方の時間厳守により、研究会全体の進行が順調に進んだことに司会者として感謝したい。また今後の報告の形式について、分科会であっても今回のような近接地域でテーマも関連性のある場合は、コメンテーターを置くか、司会者にある程度共通の論点を出すための時間的余裕を与えて頂ければ、さらに発展した議論が行われたのではないかと感じた。今後の課題として事務局に一考をお願いしたい。

(北澤 義之)

分科会4の午後の最初の報告は、駐イラク大使 Ghanim al-Jumaily 氏の“ Toward a strong partnership between Japan and Iraq ”であった。パワーポイントを効果的に使用してイラク史を古代史からひもとく報告は、七ヶ月前に日本に赴任した大使の、対日文化交流、教育面での交流事業の推進に対する強い関心と意欲の現れだったと言える。大使の「歴史と進歩の調和」への共感をイラクと日本で共有している、という指摘に対して、会場の席のほとんどを埋めた多くの聴衆から、数々の質問と積極的な意見が寄せられた。活力溢れるセッションだったと言える。

(酒井 啓子)

高橋陽子氏による発表では、イラク戦争前、イラク戦争後(CPA 期) 暫定政権以降(2004.6~現在)それぞれのメディアに関する状況が報告された。特に、現在の衛星テレビ放送(38局)の活況振りが解説され、各々の経営主体(国営、

米、イラン、ドバイなど）や番組の傾向（シーア派など）から、それらに対する分類が試みられた。国民主義的 民族主義的、宗派的 世俗的という2つの次元からなされたその分類では、世俗的で国民主義的と位置づけられる衛星放送が23局を占めた。

続いて、横田貴之氏による発表では、1970年代以降のムスリム同胞団の諸活動や、その改革イニシアティブ（2004.3）の内容が解説され、そこから非合法状態という同胞団のジレンマと、同胞団の存在を無視できない政府のジレンマの双方が指摘された。同胞団の非合法化は、政府にとっても限界に近づいており、最近の民主化要求や同胞団メンバー逮捕といった状況を含めて、政府と同胞団の関係が重大な転機を迎えるのではないかと観測が示された。（松本 弘）

大島史氏の発表では、1990年代にトルコで得票率を伸ばしている「保守派」の民族主義者行動党のイデオロギーは、実は1970年代にはイスラーム的要素を多分に含んだ「トルコ - イスラーム総合」という特色を持っていたと報告された。他方同党は、1980年代以降にトルコ民族主義の側面を強めた点も指摘された。会場からは、同党がイスラーム的要素を取り入れていた背景に関する質問が多角的に寄せられた。支持層の分析などを通じて、同党の性格付けをさらに明らかにする作業などがさらに期待される。

Ahmed KANDIL 氏の発表では、1957年には石油利権獲得に成功したアラビア石油社が2000年の利権延長交渉に失敗した要因について、石油政策における政府の役割、石油市場の構造、二国間関係などが変化したという観点から説明された。会場からは、日本側の政策担当者のアイデンティティの変化やそれに関する評価方法、報道では明らかにされにくい交渉の内情に関して、質問やコメントがあった。日本アラブ関係の研究において重要な事件に取り組んだ意義と成果を指摘できる。（中村 覚）

分科会 5

サーミー・スライマーン氏の発表は、近代19世紀における知識人の文芸活動を扱ったものであり、その近代的知識人による文学的な復興活動を紹介した。古来からのアラブの伝統とヨーロッパのあたらしいものから、さらに新たな文学のジャンルや専門用語などを定着させることを詳細に分析した発表であったが、ネイティブのノーマル・スピードでの語りは、配布されたレジュメを追うのに精一杯という方が正直なところであろうか。発表後も活発な議論とは言い難く、発表者による追加説明に終わった。

鷺見朗子氏の発表は、そのことを随分配慮しての、ゆっくりとした語りで、アフマド・シャウキーのスイーニーヤにおける建築物の描写をテーマに、アルプフトゥリーの詩とのムアーラダ（模倣・字義の意は「対立」）という手法の提示とそ

の意義の分析を行った。アルプフトゥリーがキスラーのイーワーンについて詠んだ詩の模倣として、アフマド・シャウキーがアンダルシアの建築物についての詩を詠んだことを、実際の詩をレジユメに提示しながら詳解した。また質議の時間にはアフマド・シャウキーその人についても紹介し、何故彼がアンダルシアの建築物を描いたかもわかりやすく説明した。

<アラビア語セッションを終えて>

アラビア語セッションは今回が2度目であるが、発表者として手を挙げてくれる人がまだ少なく、また質疑応答の時間にも多くの意見が出るような議論がなされていない。しかしながら、ちいさいセッションと言えども、今後もアラビア語によるセッションを継続していくことが、やがて日本人同士でもアラビア語で議論がおこなえるような、そして日本中東学会大会研究発表のおおきなひとつの柱となるようなことに、やがてはつながっていくことだろう。否、つなげていかなければならないと、今回、司会の役をいただいて思う次第である。

(岡本 久美子)

森下信子氏はイスラム哲学を文学的観点から考察するという斬新なテーマ設定に基づく「イスラム思想 10~11 世紀における寓意的作品：「ケベースの絵馬」とイブン・シーナーの「ヤクザーンの子ハイイ物語」」を発表された。氏はまず寓意・比喻・象徴の定義を示され、ついで両作品の概略を説明された後、本題の比較に移られた。これら2作品の相似点としては、枠形式、描写の技巧、図像的内容があり、相違点として、独白体と対話体、思想内容、寓意のモード、等を指摘された。イブン・シーナーの当該作品は、従来その寓意の哲学的意味をめぐって研究が進められてきたが、氏はその文学的形式、物語論的内容から作者の思想に迫ろうとしたもので、今後の展開を期待される発表であった。

ギュレチ・セリム・ユジェル氏は「現代トルコにおけるスーフィー思想家：ジョシャン師の活動と思想をめぐって」を発表された。氏は現代トルコにおける重要なスーフィー思想家であるジョシャン師(1938~2001)の、教育、文化、芸術、環境保護、社会問題、医療、観光、遺跡修復、等々、まことに多方面にわたる師の活動を綿密に跡づけられた。この発表により我々は、ジョシャン師が独自メディアの展開にも寄与し、雑誌のみならず、ラジオ・テレビ局の開設にも貢献したことを教えられた。氏は詳細な配布資料を準備されており、ジョシャン師の活動は十分に理解できたのではあるが、時間の制約もあり、発表のもう一つの柱である思想面にあまり言及する余裕がなかったのが惜まれる。

なお予定されていた Ibrahim 氏の発表は、欠席により取り止めとなった。

(岡崎 桂二)

依田純和氏の発表は、15 世紀のチュニスで書かれたラフン・アルアーンマ文献と、マルタの詩 Cantilena からのデータをもとに、マグリブ定住民方言の短母音

組織を検証したものであった。信頼できる方言資料が限られているのに加え、母音については資料の用い方に一層厳密さが求められるという条件があるにもかかわらず、同時代の2種類の資料を駆使して、マグリブ方言の通時的研究に新たな視点を提示したものである。

前田君江氏の発表は、アフマド・シャームルーの非韻律詩の形態と詩論について、文学史的位置づけ、ニーマーとの関連、イラン的文脈での純粹詩といった3つの観点から考察したものであった。非常にわかりやすいレジュメを用意していただき、誰もが議論についていける工夫がなされていた。参加者からもコメントがあったが、時間が許す限り、実際のテキスト自体の背景・解釈について詳しい言及があれば良かったと思う。

森口明美氏の発表は、コーランのアラビア語にみられる「law」節の動詞形式の多様性に着目し、後のアラビア語において条件詞 law の用法が定式化されてゆく過程を解明しようとする試みであった。参加者からは、モダリティー、談話分析、比較セム語学など別の視点の必要性も指摘された。これらを取り入れることで、さらに研究が発展するという期待をいだかせるものであった。（岡崎 英樹）

【日本中東学会第21回年次大会決算報告】

収 入	(円)	支 出	(円)
大会運営費(中東学会より)	300,000	出欠ハガキ代	31,000
大会参加費(会員157+非会員39)	196,000	消耗品費	4,651
弁当代	62,000	発表報告要旨集原稿送料	950
懇親会費(正会員83、学生会員19)	472,000	発表報告要旨集印刷費	168,000
穂高書店よりご寄附	10,000	プログラム送料	35,065
		会場設営費(音響・照明技師派遣費)	63,525
		アルバイト謝金	143,200
		弁当代	103,000
		飲み物・紙コップ代	19,800
		懇親会費	450,000
		写真現像費	6,465
		振込手数料	1,155
計	1,040,000	計	1,026,811
		収支差引残高	13,189

*残高13,189円は、2005年6月13日付で日本中東学会銀行口座に振込済。

日本中東学会年報（AJAMES）編集委員会報告

去る5月の本年度総会で報告した内容を以下に記します。

1. 昨年度活動報告：第20-1号、20-2号の編集と刊行について

第20-1号(2004年9月刊行)は、特集が“A Comparative Perspective on Asia: Market Economies”、論文数の内訳は、外国語(特集論文3・投稿論文0・書評3・その他1)、日本語(投稿論文4・その他1)で欧文率51%、第20-2号(2005年3月発行)は、特集1“Popular Movements and Political Culture in the Pre-modern Arab Cities”、特集2“Ports, Merchants and Cross-cultural Contacts”、論文数の内訳は外国語(特集論文8・投稿論文1・書評2・その他3)、日本語(投稿論文7・その他1)で欧文率60%でした。ただし、年度当初の計画では、二号合わせて外国語365頁・日本語155頁で合計520頁(欧文率70%)としていたところ、結果として外国語377頁・日本語279頁で合計656頁(欧文率57%)となり、予定した直接出版費が2,471千円から2,982千円に増えるなど大幅に予算を上回る支出をする結果になりました。これにつきましては、本誌が日本の中東研究の海外発信と国際交流を主たるミッションとし、またそのために科研費一般欧文誌の助成を受けていることから、外国語率を引き上げるために当初予定した英文の小特集を一号前倒しにしたという経緯があります。今後は慎重な刊行計画を立てるとともに、また投稿者の方にも理解をいただいでいっそうの充実をはかっていきたいと考えます。

2. 本年度の編集計画について

1) 編集委員の交代

昨年度まで6年間編集委員を務めていただいた岡崎桂二委員が退任され、新任の編集委員として村上薫委員、山中由里子委員の就任が理事会で承認されました。ご苦勞をいただいた岡崎委員にはこの場を借りてお礼を申し上げます。また、海外から新たに編集委員を委嘱することを検討しております。

2) 科研費出版助成金の交付内定について

本誌は、科研費(研究成果公開促進費・学術定期刊行物)の補助金をこれまで平成13・14年度(80万円)、平成15年度(110万円)、平成16年度(120万円)と連続して単年度ベースで受けてきましたが、今年度は初めて複数年の内定をいただくことができました。平成17・18・19年度(120万円)平成20年度(130万円)です。「一般欧文誌」(欧文率50%以上)としてのこれまでの実績が評価されたものと考えます。この内定によってより安定した刊行体制を敷くことができますが、会員の皆様にはよりいっそうの積極的な貢献とご助力を期待しております。

3) 本誌の電子ジャーナル化

すでに本誌掲載論文の執筆者にはお願いの連絡が届いていることと思いますが、今年度から本誌は国立情報学研究所が提供する電子図書館に参加して、掲載論文を電子ファイルとして電子図書館上でも公開することになり、この件を総会で承認いただきました。これによって本誌の海外発信力は飛躍的に高まり、とくに欧文で執筆した場合には掲載論文への国際的なアクセスが迅速かつ容易になって、国際学术交流が強化されることになるかと思えます。なお、本学会の会員は無料でこの電子図書館から掲載論文をダウンロードできます。電子図書館の利用には事前の登録が必要ですが（年間登録料 2,100 円）、定額契約のある大学等にご勤務の方は、こちらでも無料となります。会員以外の登録者も、1 論文 352 円でダウンロードすることができます。契約研究機関所属の方は、会員でなくとも個人負担はありません。また、非登録者の方は、Pay Per View 方式（クレジットカード決済）でダウンロードできます（1 論文 825 円）。

4) 投稿規定の改正について

投稿規程の改正が理事会で認められました（32～34 ページに掲載）。主な改正は以下の諸点です。（ ）論文要旨の語数の変化（英文で 500 ワード以上など）

（ ）注や文献の表記を「文献リスト方式」に統一する（詳しくは「日本中東学会年報（AJAMES）原稿執筆要領」（学会ホームページに掲載）参照）。（ ）電子ジャーナル化に伴い電子図書館での掲載論文の公開の承認を求める（これに伴い投稿申請票も変更になります）。

5) 編集・刊行時期の変更に伴う投稿締切月日の変更について

来年度から刊行月を従来の 9 月と 3 月から、6 月と 12 月へと変更します。これに伴い、投稿締切月日もそれぞれ半年前の 6 月と 12 月へと変更になります。変更の理由は、従来ですと校正や出版の時期が夏季あるいは年度末にかかりいくつかの問題が起きたことです。ただし、本年度は移行期として 21-2 号投稿締切：7 月 20 日、22-1 号投稿締切：12 月 20 日 となりますのでご注意ください。

6) 第 21-1 号、21-2 号特集計画について

本年度の小特集としては、2004 年 3 月学会主催ワークショップ“Changing Knowledge and Authorities in Islam”および 2005 年 3 月開催の国際宗教学・宗教史学会世界大会の中東関係パネルを中心に企画を立てております。会員の皆様には、ぜひこれ以外にも企画のアイデアをお寄せくださるようお願いいたします。

7) 新コーナーの企画

会員の皆様の博士論文の紹介をする新コーナーを計画中です。このコーナーでは博士論文の英文要旨などの掲載を通じて、日本の中東研究の状況を国際的に発信することを目的にしています。

8) 投稿・特集企画のお願い

6) で述べました小特集の企画に加えて、近年掲載数の少ない英語以外の外国語

(アラビア語・ペルシア語・トルコ語など)での原稿の投稿についても、ぜひご検討くださるようお願いいたします。(長沢 栄治)

『日本中東学会年報』投稿規程

(1992年5月制定 2003年6月改正 2005年6月再改正)

1. 投稿資格および投稿要件

投稿者は、原則として、日本中東学会会員に限ります。投稿原稿は、国内外を問わず、未発表のものに限ります。

2. 使用言語

原則として、いかなる言語の使用も可とします。論文および研究ノートについては、本文で使用した言語とは別の言語による表題とサマリーなどを付すものとします(6.3を参照)。なお、外国語の文章に関しては、その必要がある場合は、ネイティブの校閲を受けてください。

3. 投稿方法

投稿にあたっては、所定の投稿申請票(日本中東学会のホームページより、ダウンロード可)に、氏名、所属、職位、連絡先、投稿原稿の種類など(4を参照)の必要事項を記入し、それとともに、完成原稿を電子ファイル(テキストファイルまたはこれに変換できる任意のファイル)と任意の書式で印刷したハード・コピー2部(A4判)とで提出してください。また投稿申請票と完成原稿の電子ファイルは、電子メールにても提出してください。ただし、審査の公正を期すために、投稿者の氏名を査読者に知らせない審査方式(ブラインドジャッジ)を厳正に行うため(5を参照)最終的に掲載が決定するまでは、原稿には、執筆者名、所属先、職位、謝辞などは、記入しないでください。それらは、掲載原稿の最終提出段階で記入していただきます。

また、アラビア文字など通常の印刷所が保持しない文字フォントを多用する原稿については、掲載が決定した最終段階で、印刷に使用できる版下を提出してください。版下の形式については、下記の6.7を参照してください。

4. 原稿の種類と分量

- 論文(英語16,000words、他の外国語もこれに該当する語数、日本語四百字詰め原稿用紙80枚以内)
- 研究ノート、書評論文、資料紹介(英語10,000words、他の外国語もこれに該当する語数、日本語四百字詰め原稿用紙50枚以内)

- ・ 研究動向 (英語 4,000-8,000words、他の外国語もこれに該当する語数、日本語四百字詰め原稿用紙 20-40 枚)
- ・ 書評 (英語 1,000-2,000words、他の外国語もこれに該当する語数、日本語四百字詰め原稿用紙 5-10 枚)

上記の語数・枚数には、本文の他に、表題や要旨、注、参考文献、図表なども含まれます。

5. 審査

投稿原稿については、編集委員会の責任において、所定の審査規定に基づいて、ブラインドジャッジ方式での採否の審査を行います。採否および掲載号などについては、書面にて通知します。審査の結果、必要に応じて、原稿の修正を求めることもあります。なお、採否にかかわらず、一度投稿された原稿については、撤回もしくは返却の要請には応じられません。

6. 書式

6.1 原稿は、横書きとします。

6.2 原稿の構成は、表題、執筆者名(掲載原稿の最終提出段階で記入) 章立て、本文、注、謝辞(必要な場合) 引用文献(必要な場合)の順としてください。本文の章は、ローマ数字(I,II,III,)を、節は算用数字(1,2,3,)で示してください。節以下の小見出しは、下線またはイタリック体で示してください。また原稿の末尾に、掲載原稿を最終的に提出する段階で、執筆者の所属先と職位を、和文および英文で記入してください。

6.3 論文および研究ノートについては、1 ページ目に、本文とは異なる言語による表題、執筆者名(掲載原稿の最終提出段階で記入) 章立て(章タイトルのみとし、節は載せない)および要旨(長さは、日本語で四百字詰め原稿用紙 2 枚以上、英語の場合で 500words 以上、それ以外の外国語も英語に該当する語数以上のもの)を入れてください。その他の種類の原稿についても、1 ページ目に、本文と異なる言語での表題と執筆者名(掲載原稿の最終提出段階で記入)を入れてください。

6.4 本誌は、文献リスト方式の注・文献の表記を行います。注の表記、文献表記、文献リスト、その他表記上の留意点については『日本中東学会年報』(AJAMES)原稿執筆要領を参照してください。

6.5 アラビア語、ペルシア語などのラテン文字への転写方式は、執筆者の裁量に委ねますが、本誌の既刊やIJMESなどを参考に、国内外で使用されている書式に従って、統一してください。なお、転写文字は、印刷所において、原稿のハード・コピーに従って、訂正入力します。転写文字を多用する場合には、一括して置換

する方が誤植や校正ミスを防げますので、掲載決定後に電子ファイルを再提出してもらうことがあります。

6.6. 図表については、執筆者が作成し、掲載ページを指示してください。原則として、執筆者が作成した図表を版下としてそのまま使用します。図表には、通し番号と説明（キャプション）を付記してください。

6.7 執筆者が作成した原稿を、版下として使用して印刷する場合は、印字範囲が、天地 178 ミリ×左右 117 ミリに収まるように、印字して下さい。本文文字は 12Q（1 頁 34 行）注は文字を 11Q（1 頁 42 行）を基準としますが、使用する言語やパソコンソフトに応じて、読みやすい体裁で印字してください。

7. 校正

初校についてのみ著者校正をお願いします。著者校正は、誤植などの訂正を目的とするものですから、大幅な加筆や修正はしないでください。再校以降の校正は、編集委員会の責任で行います。

8. 抜刷

原稿料は支払いませんが、論文、研究ノート、書評論文、資料紹介、研究動向の執筆者には抜刷 50 部を贈呈いたします。

9. 補記

日本中東学会年報は国立情報学研究所が提供する電子図書館に参加しています。このため、投稿原稿が日本中東学会年報に採用された場合、それは印刷物として雑誌に掲載されるだけでなく、電子ファイルとして電子図書館上でも公開されます。日本中東学会は、日本中東学会年報への投稿者が、以上の点を承認しているものとみなします。

第 19 回国際宗教学宗教史会議世界大会参加報告

第 19 回国際宗教学宗教史会議世界大会が本年 3 月 24 日から 30 日まで高輪プリンス・ホテルにて開催された。日本中東学会の方から、この大会にパネルを組織して参加するようにとの要請があり、日本中東学会として Sufism: A Perspective for Peace and Coexistence という題のパネルを組織し、3 月 25 日に開催した。パネルは招集者の松本耿郎、パネリストとして鎌田繁先生、小杉泰先生、Lloyd Ridgeon 先生の 3 名、ディスカッサントに赤堀雅幸先生、竹下政孝先生の 2 名、総勢 6 名

の構成である。鎌田繁先生からは Imama and Mulla Sadra's Mystical Thought、小杉泰先生から Politics and Spirituality: Two Faces of Islamic Revivalism、Lloyd Ridgeon 先生から The Tradition of Javanmardi: A Sufi Basis for Conflict Resolution と題するレポートが提出された。この3つのレポートはムスリムの宗教的思索の諸相を広義のスーフィズムと解釈したうえで、スーフィズムが志向する平和と権力、実力、暴力など社会的政治的諸関係がいかなる関係を持つのかという問題にそれぞれの視座から光を当てるものである。レポートはいずれも充実した内容のものであり、高水準のパネルだった。会場も8割がた埋まる聴衆を得て活発な質疑応答、意見交換がおこなわれた。

なお、このパネルは日本中東学会の主催パネルということであったが非会員の鎌田繁先生の協力を仰ぐことができた。このことに紙面をかりて心からの謝意を記す。
(松本 耿郎)

学会へ入会を希望される方は、学会ホームページの「日本中東学会について」をご覧ください。学会概要、会則、入会案内が掲載されており、入会申込フォームをダウンロードできます。また、学会事務局までご連絡いただければ、入会案内と申込フォームをお送りすることもできます。

寄贈図書

【単行本】

大川玲子著 『図説 コーランの世界 写本の歴史と美のすべて』河出書房新社、2005.

酒井啓子・青山弘之編 『中東・中央アジア諸国における権力構造 - したたかな国家・翻弄される社会』岩波書店、2005.

ジョン・エスポジト編、坂井定雄監修、小田切勝子訳 『[オックスフォード]イスラームの歴史 1. 新文明の淵源』共同通信社、2005.

【逐次刊行物】

『民族研究』2004年1-6号、中国社会科学院民族学與人類学研究所、2004.

『世界民族』2004年1-6号、中国社会科学院民族学與人類学研究所、2004.

İslam Araştırmaları Dergisi (Turkish Journal of Islamic Studies), vol.7, 8, 2002.

Acta Orientalia (Academiae Scientiarum Hungaricae), Vol.56 Nos2-4 (2003), Vol. 57 No.1-2 (2004), Budapest.

Oneworld: Religion and Middle East Studies 2005, Oxford: Oneworld Publications, 2005.

2006 年度会費納入のお願い

本会は会費前納制をとっております。年次大会の折に 2006 年度分の会費納入の機会を設けさせていただきましたが、未納の方は、本号ニューズレターに郵便振替払込用紙が同封されておりますのでご利用ください。2005 年度以前の会費を未納の方はどうかお早めにお支払いください。未納分の払込確認後、当該年度の AJAMES をお送りいたします。

事務局より

盛況のうちに幕を閉じた第 21 回年次大会の翌朝、余韻さめやらぬ国立民族学博物館地域研究企画交流センターの一室で、旧事務局から新事務局への業務引継ぎが行われました。その後、5 月下旬には事務局の管理すべき書類などを収めたダンボールの山が新事務局に届けられ、6 月に入ってようやく実質的な事務局移転が完了した次第です。この間、旧事務局とりわけ森尚子さんには、新事務局が機能し始めるまで学会事務が停滞しないよう、様々なご配慮とご協力をいただきました。本当にありがとうございました。

もっとも、旧事務局から格別のご配慮をいただいたにもかかわらず、5 月末から 6 月初めにかけて、メーリングリストの設定をめぐる混乱をはじめ、様々な点で学会事務が滞ってしまったことは、会員の皆さまご存知のとおりです。ある程度時間が経って事務局運営に慣れてくれば、移転当初のような混乱は避けられるものと考えてはおりますが、なにぶん予算上の制約もあり、限られた人数で事務局を運営して行かざるを得ません。あらためて会員の皆さまのご理解・ご協力をお願い申し上げます。

なお、新事務局における事務全般は宇野陽子会員が担当いたしますが、宇野会員の勤務は原則として週 2 日です。このため、会員の皆さまからのお問い合わせやご要望に即対応できないこともあり得ること、あらかじめご承知おきください。また、ニューズレター 103 号でお知らせした電話番号、FAX 番号は変更になりました。新しい番号は本号および 2005 年度会員名簿の奥付に掲載されておりますのでご注意いただければ幸いに存じます。

(飯塚 正人)

日本中東学会ニューズレター 第 104 号

発行日 2005 年 7 月 6 日
発行所 日本中東学会事務局
印刷所 東洋出版印刷株式会社

日本中東学会事務局

〒183-8534 東京都府中市朝日町 3-11-1
東京外国語大学
アジア・アフリカ言語文化研究所
飯塚正人研究室気付
TEL & FAX 042-330-5543
E メール：james@aa.tufs.ac.jp
<http://wwwsoc.nii.ac.jp/james/index.html>
郵便振替口座：00140-0-161096
銀行口座：三井住友銀行渋谷支店
普通 No. 5346808